

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2026年2月16日
第54号

小樽再発見② 佐々木一夫さん

中央市場で喫茶「叫見楼」を再開

伝説の喫茶店「叫見楼」の店主である佐々木一夫さん。小樽運河プラザ・喫茶一番庫のマスターを終え、昨秋、中央市場第2棟（稲穂3）に喫茶「叫見楼」をオープンした。二年ぶりに訪問し、お話を聞いた。

歴史語り紡ぐマスター



喫茶店入口に立つ佐々木一夫さん

小樽運河の保存運動に関わった経験から、市民や観光客に歴史を語り継いできた佐々木さん。一九七五年、市内で喫茶店「叫見楼」を開店。運河保存運動の一環として、七八年に始まった音楽イベント「ポトフェスティバル」で中心的役割を担った。古道具の販売、小樽観光協会常務理事を経て、二〇〇八年に喫茶一番庫を開業。15年半にわたる「小樽を熱く語る」マスターとして親しまれた。

旧運河プラザは現在ルタオの

店舗になつている。喫茶店をいったん閉じた佐々木さんは開業先を探していたところ、中央市場が候補になった。80年の歴史をもつ同市場。「ここは小樽のまちをつくった民の力を感じる場所」ということで出店を決めた。

昨秋開業したお店は、広さ約19平方メートルで、カウンター4席、2人掛けテーブル席が2つの計8席。コーヒーやソフトドリンク、ケーキなどを提供する。キャッチフレーズは「小さくて、居心地が良くて、面白くて、ためになる店」という。



カウンターの板は運河保存運動でタグを組んでいた山口保さん（元小樽市議、木彫工房「メリーゴーランド」を経営、サカナクションの山口一郎さんのお父様）が加工された重厚な作品だ（上写真）。カウンターの片隅には小樽の歴史を紐解く書籍

や雑誌が並ぶ。中でも「潮陵」が目を引いた。潮陵の卒業生が寄稿されている会報だが、内容が充実している。百号を越え、歴史の重みを感じた。書籍と佐々木さんとの会話。小樽の街の情報を集めるのには最適な場所だ。

小樽の本来の魅力発信

若い頃、佐々木さんは大学をやめて、札幌の飲食店で働いていたときにヨーロッパ旅行に出かけたという。それまで、故郷の小樽を好きにはなれなかったが、海外の港町を見て、小樽の魅力や可能性に目を開かれたという。それで店を持つなら、「小樽で」と戻ることにした。



叫見楼オリジナルドレッシング人気商品です

ここに運河保存運動に携わる人々が結集することになった。論争の末、運河は半分残され、半分埋立てられた。だが、歴史

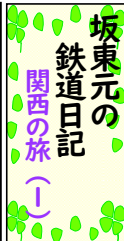
的建造物の魅力と相まって小樽はその後、観光地として注目され、現在に至っている。佐々木さんは堺町通りのような商業的な観光地を小樽らしいと考えているわけではない。小樽の本来の魅力は別なもの、それを語り紡ぐことのできる大切な人だ。

「佐々木さんのところに人が集まりますね」と言うと「一人の力ではない」と否定された。50年前のポトフェスティバルが成功したときも色々な人の力が結集して街を変えるエネルギーが生まれたという。

歴史文化は発展する

「街の記憶、歴史や文化を大切にしてほしい。するとその先に何かが生まれる。君は仁木町出身だったね。将来、故郷に戻って何かしたらいいよ」と仰った。

この日はフランス人、ロシア人、ベトナム人の留学生が立ち寄り、会話をしたという。客層は地元の常連さんが多いというが、観光客も佐々木さんとの会話を楽しみ、小樽を記憶する。



2025年12月27日時刻は正午。父に送られ、母と新千歳空港へとやってきた。ここ十年ほど、私は母方の実家がある大阪で年を越すことが恒例となっていた。

14時過ぎになり、搭乗が開始された。今回搭乗した機体は、ボーイング737であり、座席は左主翼後方の窓側を予約してもらっていた。主翼付近に座を取ることも恒例となっていた。目の前には、飛行機が数機居たが、ANA機とAIRDO機が見つめ合っている光景を見て、猫のケンカのようなだと思った。しばらくすると、飛行機は誘導路を自走し、滑走路へ侵入。遂に北の大地を離れ、大空へと飛び立った。

飛行機は、離陸後すぐに太平洋へ出た。この日は雲量が多く、地形や街、海の他に、雲の形が地域で移り変わる姿を目撃することができた。そんな景色が眼科に広がる中、私は次の美術作品に生かそうと、スマホを構えていた。

そうこうしているうちに、飛行機は着陸準備に入り、雲の下の陸地を望めるようになっていた。新幹線や在来線が横切ったことから京都府または大阪府北部だと思われる。更に、平坦で田んぼが広がる地域の上空を通過した。そこを赤い列車が走っていたことから奈良県上空へ侵入したことがわかった。高度は更に下がり、十六時頃、大阪府上空に到達した。伊丹空港付近は市街地を低空飛行することか



大阪府上空を低空飛行

ら、「こりゃ反対運動も起こるわな」と改めて思った。

伊丹空港に到着すると、多くの飛行機から歓迎を受けた。日は既に傾き、一面は橙色に照らされていた。

空港内には、みかんジュース自販機がある。伊丹空港では、これを買うのが習慣化してきた。伊丹空港からの交通機関には、大阪モノレールやバスがあるが、今回は空港バスに乗りする。大阪モノレールには幼少期以来、利用していないため、いつか乗りたいと思いつけている。そんな空港を後にすると、すぐに渋滞に巻き込まれてしまうなど、思いがけないこともあったが、無事に阿部野橋へと到達した。時刻は18時。夜空に月が綺麗に見えていた。それから、天王寺駅へ向かい、慣れ親しんだ阪和線普通に乗車。母の実家がある鶴ヶ丘駅に到着した。到着してすぐ、向かいのホームを開空紀州路快速が走り去って行った。